

## 松山大学経済学部2020(令和2)年度推薦入試合格者 課題「書評」

氏名： 吉田 百花

受験番号： 1600070

対象とした本の番号： 2

タイトル： アンクレ、セクレ

※ かならず万年筆かボールペンで「清書」すること(鉛筆・シャーペンは不可)。なお句読点(、。)や「」が行頭にくるときは、行末の字と一緒に書くかマスの右に書くこと。だれにでも癖字はありますが、丁寧に書くことを心がけてください。さらには最後に4枚をホチキスで綴じてください。

努力や正義が、社会で必ずしも通用するとは限らない。「理不尽」を多く目の当たりにするとともに、いつからかこのようすが価値観が私の中で暮れていった。皮肉なことに、理不尽さに打ちひしがれて私の心を救ってくれるものもまた、この価値観だ。

本書は、様々な環境で生きてきた六人の中学生が、陸上知識の無い美術教師と共に駅伝の県大会出場を目指す青春小説である。それが駅伝に参加する決心等をはじめ、練習や本番を走り終えるまでの期間を独自する形式でストーリーが進んでいく。さて、と本書を読み進めれば進めほど、ひたむきに走り続ける彼らのことがあなれなく愛しくなるに違ひない。

スポーツを通して描く青春小説というと、野球やバスケ等が王道かもしれません。駅伝は走っている間は孤独だが、マラソンとは違、「繋ぐ」ものが確かにある。駅伝出場のために寄せ集められた彼らが一つになっていく過程は、ヨリ一層少年たちの成長を感じさせる。また、不器用ながらも駅伝を通して仲間や自分自身に対して向き合っていく彼らの姿は、

読者の年齢や境遇に関係なく青春を感じさせるものだろク。

作者である瀬尾まいこさんはかつて中学校で国語教師として働いていた。夜にはアマチュア職場にて一マハ小説を執筆するとなれば、どんなストーリーを思い描くだろうか。どんな人物が登場し、どんな結末を迎えるだろうか。それらはき、と、少なからずあなたが現実世界で得た経験を元にして創られるだろク。決して綺麗な感情だけで物語を完成させることはないと思う。私は本音を読み終えてから、作者が元中学教師だ、ということを知り、驚愕した。もちろん教師だ、だからこそ、これが今までに少年たちの想いを青く描くことが出来たのかもしれない。しかし、教師という立場で子供と接していた人間がこの純粋な物語を書くには、子どもに対してどんな隣人愛にも勝るほどの愛情が存在しないと不可能だと思、れのだ。それは今までに本書には、作者から登場人物や作品に対する愛がある。この物語は彼女自身にしか創れないと、強く思ふ。そして、舞台は小学校でも高校でもなく中学校でなければならぬか、たのだと感じた。

中学生という時期は、子供の発達段階でいう青年前期にあたる。思春期に入、之間に

い、自己同一性いわばアイデンティティを獲得するため葛藤する時期でもある。彼らは中学校といふ、今までの小学校より少々大きい世界の中で、集団生活を始めるのだ。

「中学校でやろんと必要のは、能力じゃない。嘘偽れど、努力だ。」これは、陸上部の部長である林井の言葉だ。また、陸上部の顧問をすることには、元美術教師の上原先生は、他校の駅伝チームについて「敵と味方とか、中学のスポーツには関係ないんだな、て初めて知った」と口にする。なぜ中学校といふ世界では、能力より努力が優先され、敵や味方は関係がないのだろうか。それはきっと、努力の過程をしっかり見てくれる人がいるからだと私は思う。義務教育の言葉通り、教育を受けることが義務付けられている期間だ。私たちには与えられた課題と、自身の努力でこなしていく。そこでの能力に伴う完成度ではなく、課題達成に要した努力を重視する。それが中学校の頃は当たり前であり、だからこそ体育祭や合唱コンクール、部活動は一生懸命になれたのだろうと今では思う。学校は、結果はどうであれ、過程のなかで築きあげる友情や達成感を得るために設けられた場所でもありだらう。これに作者からのメッセージでもあると気がした。

私は今高校生で、もうすぐ大学生になる。  
 子供でも大人でもない今の私は、本書を読んで中学生が羨ましいと感じると同時に、青春を最後まで惜しみなく楽しむことを思ふ。たゞ私が本書を中学生の頃に読んでいたのは、アライドなんか捨てて泥臭くとも完走していいのか、と勇気を貰えたから。それからい、瀬尾まいこの創り出した物語は、誰しもが前向きになれる刀を持つている。この少年たちが織り成す世界は、世の中の理不尽を吹き飛ばしてしまってはどの熱意で満ち溢れている。本書を読みこんどその熱意を分けてもらえた。それからいみずみずしい青春小説なのだ。

理想的な部長像とのものである糸井の孤独を始めとして、元いじめられ、子の設楽が抱えろ責任感や不良の大田が自身を見つめる勇気、お調子者であるジローの優しさ、宗高がアライドで自身を守る渡部の真意。そして糸井意を慕つていろ後輩、俊介の葛藤。生き生きた環境が違えども彼らが互いを想つて走る姿は、何度も読んでも愛を感じずにはいられない。彼らが県大会に出場できるのは、としてどうやら、て一つには、ていくのが見届けてほしい。き、と、あたたか自身を自分の置かれても世界で食欲に努力したいと感じるへ達い。